

平成13年度病害虫発生予報

第1号(4月予報)

平成13年3月23日
津軽地域病害虫防除所
南部地域病害虫防除所

【概要】

りんごのリンゴハダニが全県的にやや多いと予想される。その他の病害虫は平年並と予想される。

《発生がやや多くなると予想される病害虫》

| | |
|-----|--------|
| りんご | リンゴハダニ |
|-----|--------|

病害虫に関する問合わせ先

| | | |
|----------------------------|--------------|----------------------------|
| 電 話 | F A X | E-mail |
| 津軽地域病害虫防除所 0172(52)9500 | 0172(53)3717 | ts-bojo@ags.pref.aomori.jp |
| 南部地域病害虫防除所 0176(23)4290 | 0176(20)1167 | na-bojo@ags.pref.aomori.jp |

1 水 稲

| 病害虫名 | 予報内容 | | | 予報の根拠 |
|---------------------------|------|------|-----|--------------------------------------------------------------|
| | 発生地域 | 発生時期 | 発生量 | |
| 苗立枯病 (ピシウム・フザリウム) | 県内全域 | - | 平年並 | 4月の気温は平年並の見込みである。 フザリウム属菌やピシウム属菌に対する効果の高い剤による防除の徹底が見込まれる。 |
| 苗立枯病 (ごま葉枯病) | 県内全域 | - | 平年並 | 前年の収穫期におけるごま葉枯病の発生量が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。 |
| 苗立枯病 (粉枯細菌) (苗立枯細菌) | 県内全域 | - | 平年並 | 前年の発生が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。 |
| ばか苗病 | 県内全域 | - | 平年並 | 前年の本田における発生量が平年並であった。 効果が高い剤による種子消毒の徹底が見込まれる。 |

(1) 防除のポイント

《3~4月の防除作業》

| 3月 | | 4月 | | | | |
|-------|------|-------|---------|------|-----|-----|
| 5半旬 | 6半旬 | 1半旬 | 2半旬 | 3半旬 | 4半旬 | 5半旬 |
| 塩水選 / | 浸種 / | 催芽・播種 | / 出芽・綠化 | / 硬化 | | |

種子消毒

フザリウム・ピシウム属菌による苗立枯病防除

リゾープス属菌による苗立枯病防除

細菌性苗立枯病菌による苗立枯病防除

イネドロオイムシ防除(床土混和)

イネミズゾウムシ防除(播種時処理)

いもち病(播種時処理)

いもち病(綠化期処理)

注: 印は必ず防除する。

印は前年の発生状況及び品種に応じて防除する。

【種類の準備】

自家産の粉を種類として使用する場合は、いもち病、ばか苗病やごま葉枯病、粉枯細菌病等が発生しなかったほ場産の粉を使用する。

【塩水選】

塩水選は充実した粉を選別するばかりではなく、いもち病、ばか苗病やごま葉枯病等に感染した粉を除去するために重要な作業であることから必ず実施する。

塩水の濃度は基準を守り、丁寧に実施するとともに、塩水選後は十分水洗いする。

【種子消毒】

塩水選後浸種前に、次の表のいずれかで種子消毒を行う。

薬液の量は、種粉と同じかそれ以上の容量とし、種粉が薬液から出ないようにする。

薬液に浸漬して消毒する場合は、薬液の温度が10℃以下の低温になると防除効果が低下する傾向があるので、液温があまり低くならないように屋内で消毒を行う。

低濃度長時間浸漬で消毒する場合は、浸漬中に2~3回薬液をよく搅拌する。

高濃度短時間浸漬で消毒する場合は、網袋に入れた粉に薬液がよく付着するように網袋をよくゆする。

生割れ以上の種粉を消毒すると、生育遅延等の薬害を生ずるので行わない。

種子消毒剤の防除対象病害一覧表

| 農 薬 名 | 処 理 方 法 | 風 乾 | 対 象 病 害 虫 | | | | |
|---------------------------|----------------------------------------------|--------|------------------|------------------|-----------------------|----------------------------|----------------------------|
| | | | ば か 苗 病 | い も ち 病 | ご ま 葉 枯 病 | も み 枯 細 菌 病 | 苗 立 枯 細 菌 病 |
| ヘルシード水和剤 | 20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間 | | | | | | |
| ヘルシード乳剤 | 20倍、10分間 200倍、24時間 | | | | | | |
| ヘルシード T水和剤 | 20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間 | | | | | | |
| ヘルシード Tフロアブル ケス 水和剤 | 20倍、10分間 200倍、24時間 20倍、10分間 0.5%、粉衣 | | | | | | |
| テクリード水和剤 | 20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間 | | | | | | |
| テクリードC フロアブル | 20倍、10分間 200倍、24時間 | | | | | | |
| トリフミン水和剤 | 30倍、10分間 0.5%、粉衣 | | | | | | |
| トリフミン乳剤 | 30倍、10分間 300倍、24時間 5~10倍、3%塗沫 | | | | | | |
| スポルタック乳剤 | 100倍、10分間 1000倍、24時間 | | | | | | |
| スター ナ水和剤 | 20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間 | | | | | | |
| トリフミン スター ナSE | 20倍、10分間 200倍、24時間 7.5倍、3%塗沫 | | | | | | |
| モミガードC 水和剤 | 0.5%、粉衣 200倍、24時間 7.5倍、3%塗沫 | | | | | | |

注) スター ナ水和剤は、ばか苗病、いもち病等の防除剤との混用で使用する。
風乾欄に印のある農薬を使用する場合は必ず風乾する。

【 浸 種 】

浸種時の水の量は、種粒の2倍かそれ以上の容量とする。

浸種中の水温が低いと消毒の効果が低下する傾向があるので、水温は10以下にならないようにする。

消毒後の浸種は流水を避け、水の交換は初めの2日間は行わない。その後は3日に1回程度、静かに換水する。

【 催 芽 】

催芽の際に使用するわら類は、70以上湯に20分間浸漬して消毒する。

循環式催芽機(ハト胸催芽機)は細菌の増殖を助長があるので消毒等には使用しない。

【 フザリウム・ビシウム属菌による苗立枯病の防除】

土壤のpHを5.0前後に矯正する。

播種前に、タチガレエース粉剤を育苗箱1箱当たり8gの割合で床土に均一に混和するか、タチ

ガレエース液剤の 500 ~ 1000 倍液を、育苗箱に床土を詰めかん水してから、箱当たり 500 ml の割合でかん注する。

育苗中の温度管理を徹底する。また、過湿にならないように注意し、健苗育成に努める。

【リゾーブス属菌による苗立枯病の防除】

育苗箱等の育苗資材は、十分水洗いしたものを使用する。

傷粉の混入が多いと多発しやすいので、傷粉の混入が多い粉は、種粉として使用しない。

厚播きすると発生が多くなるので、基準播種量を守る。

播種 5 日前 ~ 播種時に、ダコニール粉剤を箱当たり 15 ~ 20 g の割合で床土に均一に混和するか、育苗箱に土を詰め、かん水してからダコニール 1000 の 500 倍液を箱当たり 500ml の割合でかん注する。なお、いずれの場合もタチガレエース剤と併用または混用ができるが、ダコニール粉剤とタチガレエース粉剤との併用では初期生育を抑制があるので、基準薬量を厳守する。

高温、過湿で多発するので注意する。

特に、播種 ~ 出芽期の温度は 30 ~ 32 ℃、緑化 ~ 1.5 葉期の温度は 30 ℃ 以上にならないよう注意する。

【ごま葉枯病菌による苗立枯病の防除】

種子消毒のほか、次のことも注意する。

種粉等が露出していると二次感染が多くなるので、覆土は十分に行う。

育苗時の高温・過湿は発病を助長するので、適正な育苗管理に努める。

【もみ枯細菌病・苗立枯細菌病菌による苗立枯病の防除】

前述の[種子消毒]あるいは、次のいずれかで行う。

播種前に、カスミン粒剤を育苗箱 1 箱当たり 30 g の割合で床土に均一に混和するか、播種後覆土前にカスミン粒剤を育苗箱 1 箱当たり 15 ~ 20 g を、播種した種粉の上から均一に散粒するか、カスミン液剤の 4 ~ 8 倍液を育苗箱 1 箱当たり 50ml を播種した種粉の上から均一に散布する。

育苗中の温度管理を徹底する。特に高温、過湿にならないように注意し、健苗育成に努める。

【床土混和によるイネドロオイムシ、イネミズゾウムシの防除】

発生が多いほ場や本田での防除が労力的に難しい場合には、パダン粒剤 4 を育苗箱当たり 80g の割合で床土用の土に混和する。ただし、覆土用の土にパダン粒剤 4 を混和すると薬害を生ずるので、覆土には混和しない。

【苗代におけるケラの防除】

[播種前] 耕起、整地して置床を作つてから、ダイアジノン粒剤 5 を 10 m²当たり 60 g の割合で置床とその周辺に均一に散布する。

【苗代におけるキリウジガガンボの防除】

[播種前] 耕起、整地して置床を作つてから、バイジット乳剤 1000 倍液を、苗床 1 m²当たり 300 ~ 500 ml 敷布する。

【播種時または緑化期におけるいち病防除】

前年発生の多かったほ場や抵抗性の弱い品種では、播種前後(覆土前)又は緑化期にデラウス粒剤を育苗箱 1 箱当たり 50 g 均一に散布する。

(2) 防除上注意すべき事項

消毒後の種粉は、魚介類に強い影響を及ぼす消毒剤もあるので河川、湖沼、ため池等で浸種しない。また、残液や器具の洗浄液がこれらの水系に流入しないようにする。

消毒した種粉は、食用や家畜の飼料としない。

薬剤処理は素手で行わない。

ダコニール粉剤は、砂質土壤では初期生育の抑制等の薬害を生じることがあるので、使用しない。

イネドロオイムシ、イネミズゾウムシ対象のパダン粒剤による床土混和は、床土の種類により薬害(葉先枯れ・巻葉)を生ずることがあるので、次の土壤には使用しない。

○火山灰性の畑土・山土(りん酸吸収係数 2000 以上の土壤)。

○砂土など有機物の含量の少ない土壤。

2 りんご

| 病害虫名 | 予報内容 | | | 予報の根拠 |
|-----------------|------|---------------------|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | 発生地域 | 発生時期 | 発生量 | |
| モニリア病 (葉腐れ) | 県内全域 | 平年並 | 平年並 | 前年の実腐れの発生が平年並であった。 4月の気温、降水量は平年並の見込みである。 |
| 腐らん病 (枝腐らん) | 県内全域 | - | 平年並 | 厳冬のため3月の発生量が抑えられているが、例年のパターンから今後増加すると見込まれる。 |
| リンゴコカク モンハマキ | 県内全域 | 平年並 (芽への 食入) | 平年並 | 越冬幼虫量が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。 |
| リンゴモンハ マキ | 南部地域 | 平年並 (芽への 食入) | 平年並 | 越冬幼虫量が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。 |
| キンモンホソ ガ | 県内全域 | 平年並 | 平年並 | 前年の第四世代の発生量が平年並であった。 4月の気温は平年並の見込みである。 |
| リンゴハダニ | 県内全域 | 平年並 (越冬卵の ふ化) | やや多い | 越冬卵量が平年並であったが、発生地点率は高かった。 (津軽地域) 越冬卵量は平年に比べやや多く、一部で多発園も見られた。 (南部地域) 4月の気温は平年並の見込みである。 |

(1) 防除のポイント

【モニリア病】

消雪を促進し、排水に努め、地表の乾燥を図る。

「芽出し当時」は防除上最も重要な時期なので、薬剤散布は遅れないように必ず行う。

葉腐れは見つけ次第摘み取って処分する。

【腐らん病】

薬剤だけに頼ることなく、常時園内を見回り早期発見、早期治療を行う。

発芽前の粗皮削りは必ず行う。

剪定後の切口にはできるだけその日のうちにバッチレートを塗る。

芽出し当時の薬剤散布は遅れないように必ず行い、枝幹部に十分付着するように散布する。

胴腐らんは発見次第泥巻きを行うか、削り取って塗布剤を塗る。トップジンMオイルペーストは薬剤耐性の懸念があるため、再発した場合は、泥巻を行うか、他の塗布剤を塗る。

【ハマキムシ類】

芽出し10日後にハマキムシ類防除剤を加用する。

リンゴコカクモンハマキにはダーズバン水和剤、トクチオン水和剤のいずれかの防除薬剤を使用する。

リンゴモンハマキにはスミチオン水和剤、ダーズバン水和剤、トクチオン水和剤、エルサン水和剤、ミクロデナポン水和剤、スプラサイド水和剤のいずれかの防除薬剤を使用する。

この時期のピレスロイド剤散布は訪花昆虫への影響が懸念されるので絶対に使用しない。

【キンモンホソガ】

発生が多い場合は、芽出し10日後に硫酸ニコチン液剤、デミリン水和剤、アドマイヤー水和剤、モスピラン水溶剤のいずれかの防除剤を加用する。

【リンゴハダニ】

越冬卵を殺卵するため、芽出し当時のマシン油乳剤の散布は遅れないように必ず行う。

3 畑作・野菜

| 病害虫名 | 予報内容 | | | 予報の根拠 |
|---------------|------|------|-----|-----------------------|
| | 発生地域 | 発生時期 | 発生量 | |
| (にんにく) 春腐病 | 県内全域 | - | 平年並 | 4月の気温、降水量は平年並の見込みである。 |

(1) 防除のポイント

にんにく

【春腐病】

発生しやすい条件

植付時期が早く、越冬前の葉数が多くなると、下葉が雪害を受けやすく、感染が助長されるおそれがある。

降雨が続く場合に感染しやすく、高温で発病が助長される。

有機物や肥料が過剰投入されたほ場及び排水性の良くないほ場では、多発する傾向がある。

防除方法

積雪の多い地帯では、土壤湿度の高い状態が続き、地下部の腐敗が多くなるので注意する。

消雪が遅れたほ場及び排水性の良くないほ場では、滞水しないよう排水に努める。

消雪後の腐敗株は伝染源となるので、抜き取り処分する。抜き取り実施後、発生が見られたら、7日おき位に次のいずれかの薬剤を数回散布する。

《防除薬剤一覧表》

| 病害名 | 薬剤名 | 希釈倍数 | 使用時期 | 使用回数 |
|-----|-------------|------|---------|------|
| 春腐病 | コサイドDF | 1000 | - | - |
| | コサイドボルドー | 1000 | - | - |
| | Zボルドー | 500 | - | - |
| | ICボルドー66D | 50 | - | - |
| | 銅・カスガマイシン剤 | 1000 | 収穫7日前まで | 5回以内 |
| | バリダシン液剤5 | 800 | 収穫7日前まで | 5回以内 |
| | アグリマイシン-100 | 1000 | 収穫7日前まで | 3回以内 |

銅・カスガマイシン剤：カスミンボルドー、カッパーシン水和剤

注) 展着剤は湿展性の良いものを使う。

コサイドボルドーは薬害回避のため必ずクレフノンを200倍で加用する。

銅・カスガマイシン剤は、高温時及び生育初期に散布すると葉先枯れを生じることがあるので、散布時期に注意する。